

インフルエンザの予防接種

インフルエンザは脳炎や肺炎をおこしやすい、普通のかぜとはまったく違う重い病気です。子どもの場合、1回の接種だけでは十分な免疫ができません。

重症化を予防するのに必要な免疫ができるのは、2回目を接種して2週間ほどたったころからです。毎年、流行するウイルスの型が違い、それにあわせてワクチンがつくられています。前のシーズンに接種していても予防効果は期待できませんので、原則として毎年、2回ずつ接種しましょう。

接種時期と接種回数

流行が始まる前に2回接種が終わるように、1回目は10～11月、2回目は12月中旬までに接種しましょう。

生後6か月以上で12歳まで（13歳未満）では2回ずつ接種します。

13歳以上は通常1回接種ですが、2回接種することもできます。

接種間隔は、およそ2～4週間（なるべく4週間）。

接種量は2011年シーズンから変更されて、特に小さい子どもの量が増えました。

春まで流行が続くことがあるので、やむをえず遅くなっても、あきらめず接種しましょう。

副反応

接種部の軽い痛み・腫れがほとんどで、ときに発熱することがあります。まれに神経疾患など重い副反応の報告がありますが、ワクチンとの因果関係は証明されていません。

強い卵アレルギー（ショックや呼吸困難など）の方は相談してください。

ワクチンの効果

予防効果はほかのワクチンと比べると低く、子どもの場合、A型では予防効果があるのは30～50%程度で、B型や1歳未満ではさらに効果が低くなります。

しかし、2011年シーズンからはワクチンの接種量が変更になり、6か月以上3歳未満が大人の半量の0.25mL、3歳以上が大人と同じ、0.5mLに増えたので、より良い効果が期待できます。インフルエンザワクチンは発病予防だけでなく、重症化予防として接種することをおすすめします。ワクチン接種によって発病や重症化が予防できるケースが多く、結果として脳炎の予防にもなります。



ハビネス こども クリニック

お問い合わせは…

087-848-9178

